

小中学校における不登校経験者の通信制高校での適応 — 行動面(登校状況)と意識面(不登校への今の気持ち)に着目して —

Adaptation of Students Who Have Experiences of Truancy in Elementary and
Junior High Schools to Correspondence High Schools
— Focusing on Their Behavior (Attendance) and Consciousness (Their Feelings towards
Truancy) —

金子 恵美子* 伊藤 美奈子**

要旨 本研究では、A 通信制高等学校に通う1年生のうち不登校経験のある生徒187名への質問紙調査の結果から、不登校経験者の通信制高校での適応状況を行動面(高校での登校状況)と意識面(不登校への今の気持ち)からとらえ、高校での適応状況が高校からの支援とどのように関連し、さらに不登校経験への評価とどのように関連しているのかについて検討を行った。(1) 行動面(登校状況)での回復が良好な生徒と不良な生徒では、意識面(不登校への今の気持ち)に差が見られ、登校不良な生徒のほうが意識面で不安定な生徒が多かった。一方で、行動面では回復している生徒でも、意識面では安定した状態に至っていない生徒も約半数見られることが明らかになった。(2) 行動面での回復が良好な生徒の中でも意識面で回復の状態により学校からの支援への認知に差が見られ、「学習・進路への支援」「居心地の良さ」「成長できる環境」などは、意識面で不安定な生徒で認知が低かった。

【キーワード：通信制高校、不登校経験、高校での適応】

I. はじめに

小中学校における不登校児童生徒数は、平成29年度は約14万4000人にのぼり¹⁾、不登校は現在も重要な問題である。不登校児童生徒の中学卒業後の進路として注目されているのが通信制高校や定時制高校等であり、全日制高校とは異なるゆるやかな枠組みやサポート的な環境が不登校経験者の学校適応を支えていること^{2) 3)}が従来の研究でも指摘されている。

通信制高校は、平成4年度には90校だったものが、平成24年度には217校に増加しており、在籍している生徒数も平成24年度には約19万人となっている⁴⁾。また、近年では定時制高校や通信制高校に通う生徒のうち、無職である生徒が約7割となっている⁵⁾との調査結果もあり、就労者のための学校という位置づけから、多様なニーズをもつ生徒への支援の場へと変わってきていることがうかがえる。通信制高校としてのゆるやかな枠組みを生かし、生徒の興味関心に合わせた多様なコースを設けたり、“全日型”といわれるような毎日通うコースを設けている通信制高校が増えているこ

とも通信制高校へのニーズが多様化してきたことを反映したものといえるだろう。

そうしたさまざまなニーズに対して対応する通信制高校や定時制高校では、小中学校において不登校であった生徒でも登校を継続できていることが少なくなく、通信制高校や定時制高校における支援が不登校経験者の高校生活への適応を支えているものと考えられる。一方で、不登校を経験し通信制高校や定時制高校へと進学した生徒の中には高校においても登校状況が不調な状態が続く生徒もおり、不登校経験者の高校での登校状況は生徒によって異なっている。また、高校での登校状況だけでなく、意識面での思いにも差が見られることが推測され、もう不登校には戻らないと感じている生徒といつ不登校に戻ってしまうかわからないという不安を抱えている生徒が通信制高校や定時制高校に通う不登校経験者の中には混在しているものと思われる。先行研究では、不登校経験者のうち現在の適応が良好な生徒は過去の不登校経験をポジティブに評価することが指摘されている⁶⁾。通信制高校や定時制高校における適応状況

* 埼玉純真短期大学 こども学科 准教授

** 奈良女子大学 准教授

が過去の不登校経験への評価にもつながり、生徒の今後の展望にも影響を与えることが考えられ、不登校経験者の通信制高校や定時制高校での適応状況を明らかにし、通信制高校のどのような支援が不登校経験者の高校での適応を支えているのかについて検討することは、不登校経験者のその後を考える上で重要であると考えられる。

そこで本研究では、小中学校における不登校経験者を多く受け入れているA通信制高校に着目し、そこに通う1年生を対象として質問紙調査を行い、高校での適応を行動面（登校状況）と意識面（不登校への今の気持ち）からとらえ、不登校経験からの回復状況について明らかにした上で、通信制高校での適応状況が高校からの支援とどのように関連しており、さらに高校での適応状況が不登校経験への評価とどのように関連しているのかについて検討を行う。

II. 方法

1. 調査方法 質問紙調査
2. 調査時期 第1回調査2015年5月
第2回調査2015年11～12月
3. 調査対象・分析対象 調査対象はA通信制高校に通う1年生。第2回調査時に回答のあった367名（男子200名、女子157名、不明10名）のうち、本研究では特に不登校経験のある生徒に着目して検討を行うため、不登校経験のある生徒187名（男子97名、女子87名、不明3名）を分析対象とした。A高校は、生徒の状況や興味・関心に合わせた選択ができるように週5日通学するコースと週1～4日通学するコース、多様な専門コースなどを設けている。
4. 調査手続き A高校に協力を依頼してクラスごとに質問紙を実施した。質問紙には、「結果は全体で集計し個人の情報を残すことはないこと」「回答したくない質問には無理に回答しなくてもよいこと」「このアンケートの結果が高校生活や成績に影響することはないこと」を記載した。
5. 調査内容
 - 1) 不登校経験の有無（第1回、第2回時） 不登校経験がある生徒にのみ回答を求めた。「休み

始めた学年・時期」「期間」「心身状態」「きっかけ」「不登校への今の気持ち」「不登校経験の影響」「不登校経験への評価」に回答した生徒を「不登校経験あり」として分類した。

- 2) 登校状況（第2回時） 片岡の登校状況に関する項目²⁾を参考に、学校を休むことについて「ほとんど休まない」「月に1～2回」「週に1～2日」「週に3～4日」「毎日休む」の5段階で評定を求めた。
- 3) 不登校への今の気持ち（第2回時） 伊藤らの項目⁶⁾を参考に、不登校への今の気持ちについて「もう不登校時代に戻らないと思う」「いつ戻るかわからない」「考えない、考えないようにしている」から1つ選択するよう求めた。
- 4) 不登校時の心身状態（第1回時） 伊藤らの項目⁶⁾を使用し、6項目（「ひきこもり」「無気力（やる気が出ない）」「身体症状（頭痛・腹痛・吐き気など）」「うつ状態」「家での暴力」「昼夜逆転・生活の乱れ」）について不登校時にあったものすべてを選択するよう求めた。
- 5) 学校からの支援（第2回時） A通信制高校の教員、生徒への事前インタビューから15項目を作成し、「とてもあてはまる」「まああてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の4件法で評定を求めた。事前インタビューは、2012年7月にA高校1～3年生20名、10月に教員6名を対象に実施し、高校での生徒の変化・成長の過程、学校や教員の支援を明らかにすることを目的とし、生徒には入学時の不安や期待、入学後の変化、不登校時の様子、将来展望等、教員には学校の特徴や生徒へのかかわり、生徒の変化等について尋ねたものである。
- 6) 不登校経験への評価（第2回時） 伊藤らの11項目⁶⁾に家族、友人、先生のサポートへの感謝3項目を加えた14項目について「大いにそう思う」「少しそう思う」「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」の4件法で評定を求めた。

III. 結果

1. 因子分析
 - 1) 各尺度の因子分析（最尤法・プロマックス回転）

学校からの支援は、固有値 1.0 以上の基準、固有値の減退率から因子を抽出し、因子負荷量が .350 に満たない項目を削除し再度因子分析を行った結果、4 因子が得られた（表 1）。第 1 因子は「将来に役立つ資格を取ることができる」「希望の進路に合った授業が受けられる」などの項目から構成されており、「学習・進路への支援」と命名した。第 2 因子は「必要なときに先生はサポートしてくれる」「先生が親しみやすい」などの項目から構成されて

おり、「サポート体制の充実」と命名した。第 3 因子は「自分にとって過ごしやすい雰囲気がある」「自分のペースに合わせて生活できる」などの項目から構成され、「居心地の良さ」と命名した。第 4 因子は「自分が成長できる環境がある」「自分のがんばりたいことに挑戦できる環境がある」の項目から構成され、「成長できる環境」と命名した。

不登校経験への評価は、固有値 1.0 以上の基準、固有値の減退率から因子を抽出し、3 因子が得ら

表 1. 学校からの支援の因子分析結果（最尤法・プロマックス回転）と因子間相関

項目	F1	F2	F3	F4
第 1 因子「学習・進路への支援」				
4. 将来に役立つ資格を取ることができる	.869	.005	-.149	-.010
3. 希望の進路に合った授業が受けられる	.828	.071	.040	-.107
2. 関心のある教科・内容を学ぶことができる	.695	-.093	.306	-.036
1. 勉強を基礎から学べる環境がある	.601	.036	.039	.083
11. 実習や発表など自分の力を高める機会が充実している	.442	.167	-.058	.307
第 2 因子「サポート体制の充実」				
8. 必要なときに先生はサポートしてくれる	.081	.924	-.036	-.082
7. 先生が親しみやすい	.028	.786	.018	-.015
10. 人間関係で困ったときにサポートしてもらえる	-.056	.630	.226	.036
第 3 因子「居心地の良さ」				
6. 自分にとって過ごしやすい雰囲気がある	.031	.057	.763	.009
5. 自分のペースに合わせて生活できる	.305	-.045	.598	-.024
9. 充実した友人関係が築けている	-.167	.257	.578	.097
第 4 因子「成長できる環境」				
13. 自分が成長できる環境がある	-.050	-.064	.034	1.049
15. 自分のがんばりたいことに挑戦できる環境がある	.238	.212	.076	.377
因子間相関	F1	F2	F3	F4
F2	.681	—		
F3	.721	.729	—	
F4	.646	.687	.707	—

れた（表2）。第1因子は「自分自身を見つめ直すことができた」「人の気持ちや痛みを理解できるようになった」など項目から構成されており、「プラスの経験」と命名した。第2因子は「家族の大切さやありがたさがわかった」「休んでいたときの家族のサポートに感謝している」などの項目から構成され、「家族への感謝」と命名した。第3因子は「中学校での思い出が作れなかった」「友達が少なくなった」から構成され、「マイナスの経験」と命名した。

2) 合成変数構成と内的整合性

因子分析の結果をもとに、因子ごとに項目得点を合計し項目数で除した尺度得点を使用する。また、信頼性を検討するため α 係数を求めたところ、学校からの支援:「学習・進路への支援」因子(.88),「サポート体制の充実」因子(.86),「居心地の良さ」因子(.81),「成長できる環境」因子(.83), 不登校経験への評価:「プラスの経験」因子(.76),「家族への感謝」因子(.80),「マイナスの経験」(.63)

であった。

1. 高校での適応

不登校経験者の高校での適応状況について、行動面（高校での登校状況）と意識面（不登校への今の気持ち）からとらえたものをまとめたものが表3である。

まず、行動面（高校での登校状況）について、「ほとんど休まない」「月に1～2回」と回答した生徒を“登校良好”とし、「週に1～2日」「週に3～4日」「毎日休む」と回答した生徒を“登校不良”と分類した。次に、意識面（不登校への今の気持ち）については「もう不登校時代に戻らないと思う」生徒を“安定”,「いつ戻るかわからない」生徒を“不安定”,「考えない, 考えないようにしている」生徒を“意識しない”とした。

行動面(“登校良好”“登校不良”)による意識面(“安定”“不安定”“意識しない”)の差について χ^2 検定を行ったところ、有意差が見られた。残差分析の

表2. 不登校経験への評価の因子分析結果（最尤法・プロマックス回転）と因子間相関

項目	F1	F2	F3	
第 1 因子「プラスの経験」				
3. 自分自身を見つめ直すことができた	.798	-.015	-.022	
2. 人の気持ちや痛みを理解できるようになった	.740	-.020	-.087	
4. 休んだ期間があるからこそ今の自分があると思えた	.560	-.002	.187	
5. いろいろな人と出会えた	.483	.234	-.119	
第 2 因子「家族への感謝」				
1. 家族の大切さやありがたさがわかった	.021	.898	-.071	
12. 休んでいたときの家族のサポートに感謝している	-.014	.800	-.036	
9. 家族に心配や迷惑を掛けたと思う	.057	.519	.301	
第 3 因子「マイナスの経験」				
10. 中学校での思い出が作れなかった	.145	-.074	.730	
8. 友だちが少なくなった	-.179	.045	.644	
	因子間相関	F1	F2	F3
	F2	.608	—	
	F3	.265	.212	—

表3. 不登校からの回復状況

人 (%)

項目	安定 (もう不登校時代に 戻らないと思う)	不安定 (いつ戻るか わからない)	意識しない (考えない, 考えない ようにしている)	χ^2 値
登校良好	53 (39.6)	37 (27.6)	44 (32.8)	6.26*
登校不良	7 (17.9)	14 (35.9)	18 (46.2)	

*p<.01

結果, “安定”のみ差が見られ, “登校不良”の生徒では“安定”が約2割であるのに対し, “登校良好”の生徒では“安定”が約4割と有意に多かった。“不安定”, “意識しない”では差が見られなかったが, “登校良好”の生徒では, “不安定”, “意識しない”がそれぞれ約3割, “登校不良”の生徒では“不安定”, “意識しない”がそれぞれ約4割であった。登校不良の生徒では, 約8割の生徒が意識面でも不安定であると感じていたり, 不登校経験について考えないようにしていることが明らかになった。

2. 高校での適応状況と不登校時の状態との関連

高校での適応状況に関連する不登校時の状態について検討するため, 不登校時の心身状態を取り上げ, 行動面 (高校での登校状況), 意識面 (不登校への今の気持ち) それぞれと, 「ひきこもり」「無気力 (やる気が出ない)」「身体症状 (頭痛・腹痛・吐き気など)」「うつ状態」「家での暴力」「昼夜逆転・

生活の乱れ」が「あった」と回答した生徒の割合を算出し, χ^2 検定を行った。

行動面 (登校状況) では, 「昼夜逆転・生活の乱れ」で有意差が見られ (表4), 「あった」と回答した生徒が登校不良の生徒のほうに多く見られた。意識面 (不登校への今の気持ち) では, いずれの項目とも有意差は見られなかった (表5)。

3. 高校での適応状況5タイプと学校からの支援, 不登校経験への評価との関連

行動面 (高校での登校状況) と意識面 (不登校への今の気持ち) の組み合わせから, 高校での適応状況を5タイプ (“登校良好—安定” “登校良好—不安定” “登校良好—意識しない” “登校不良—不安定” “登校不良—意識しない”) に分類した。人数が10名未満であった“登校不良—安定”タイプは除いている。

これら5タイプの適応状況が, 学校からの支援

表4. 行動面 (登校状況) と不登校時の心身状態との関連

人 (%)

	登校良好	登校不良	χ^2 値
ひきこもり	60 (44.4)	15 (45.5)	n.s.
無気力	81 (60.0)	24 (72.7)	n.s.
身体症状	48 (35.6)	15 (45.5)	n.s.
うつ状態	24 (17.8)	9 (27.3)	n.s.
家での暴力	8 (5.9)	4 (12.1)	n.s.
昼夜逆転	69 (51.1)	28 (84.8)	12.37**

※「あった」と回答した人数

**p<.01

表5. 意識面（不登校への今の気持ち）と不登校時の心身状態との関連

人（％）

	もう戻らない	いつ戻るかわからない	考えない
ひきこもり	32 (55.2)	23 (47.9)	21 (38.9)
無気力	40 (69.0)	29 (60.4)	35 (64.8)
身体症状	19 (32.8)	22 (45.8)	22 (40.7)
うつ状態	13 (22.4)	10 (20.8)	11 (20.4)
家での暴力	3 (6.3)	3 (6.3)	6 (11.1)
昼夜逆転	30 (51.7)	35 (72.9)	33 (61.1)

※「あった」と回答した人数

とどのように関連しており、不登校経験への評価とどのように関連しているかを検討するため、不登校からの回復状況5タイプによる一要因の分散分析を行った（表6）。

まず、学校からの支援4因子については、その平均得点はいずれのタイプにおいても中間点である2.5点を超えていた。

5タイプでは、「サポート体制の充実」ではタイプによる差は見られなかったが、「学習・進路への支援」(F (4,154) =3.00, p<.05),「居心地の良さ」(F (4,160) =6.10, p<.01),「成長できる環境」(F (4,160) =3.98, p<.01) ではタイプによる有意差が見られた。TUKEY法による多重比較を行ったと

ころ、「学習・進路への支援」では“登校良好—安定”タイプが“登校良好—不安定”タイプより高い得点を示し、「居心地の良さ」「成長できる環境」では“登校良好—安定”タイプが“登校良好—不安定”“登校不良—意識しない”タイプより高い得点を示した。

次に、不登校経験への評価3因子では、「マイナスの経験」についてはタイプによる有意差は見られなかったが、「プラスの経験」(F (4,159) =2.59, p<.05),「家族への感謝」(F (4,160) =2.60, p<.05) ではタイプによる有意差が見られた。有意水準5%でTUKEY法による多重比較を行ったところ、「プラスの経験」「家族への感謝」について多重比較では差は見られなかった。

表6. 適応状況5タイプごとの学校からの支援, 不登校経験への評価の平均値と一要因分散分析結果 M(SD)

登校状況— 今の気持ち	良好— 安定 (N=53)	良好— 不安定 (N=37)	良好— 意識しない (N=44)	不良— 不安定 (N=14)	不良— 意識しない (N=18)	F 値
学校の支援						
「学習・進路への支援」	3.27 (0.54)	2.87 (0.69)	2.99 (0.49)	3.01 (0.80)	2.84 (0.74)	3.00*
「サポート体制の充実」	3.09 (0.65)	2.76 (0.69)	2.97 (0.66)	3.02 (0.62)	2.78 (0.87)	n.s.
「居心地の良さ」	3.30 (0.64)	2.71 (0.74)	2.99 (0.65)	2.83 (0.71)	2.56 (0.86)	6.10**
「成長できる環境」	3.36 (0.61)	2.91 (0.75)	3.14 (0.62)	3.07 (0.68)	2.78 (0.71)	3.98**
不登校経験への評価						
「プラスの経験」	3.25 (0.81)	2.84 (0.80)	3.11 (0.77)	2.74 (0.74)	2.80 (0.78)	2.59*
「家族への感謝」	3.51 (0.68)	3.18 (0.78)	3.22 (0.71)	3.00 (0.98)	2.98 (0.86)	2.60*
「マイナスの経験」	2.49 (1.00)	2.62 (1.06)	2.65 (0.93)	2.61 (0.74)	2.35 (1.01)	n.s.

**p<.01 *p<.05

IV. 考察

本研究では、不登校経験者の高校での適応を行動面（登校状況）と意識面（不登校への今の気持ち）からとらえ、不登校経験者の高校での適応状況が学校からの支援とどのように関連しており、さらに高校での適応状況が不登校経験への評価とどのように関連しているのかについて検討を行った。

不登校からの回復状況について、行動面（登校状況）と意識面（不登校への今の気持ち）からとらえ、その組み合わせにより検討したところ、行動面で登校状況が良好な生徒と登校状況が不良な生徒では、意識面（不登校への今の気持ち）で安定していると感じている生徒について差が見られた。登校良好な生徒のほうが意識面においても安定していると感じている生徒が多く、意識面での回復は行動面での回復と関連があるといえる。また、登校状況が不良な生徒では、約8割の生徒が意識面でも不安定であると感じていたり、不登校経験について考えないようにしていることが明らかになり、行動面での不調だけでなく心理的にもかなり不調な状況にあると考えられる。一方で、行動面では回復していると考えられる登校良好の生徒でも、意識面で「もう不登校時代に戻らないと思う」と安定している生徒は約4割にとどまり、意識面では不安定であると感じていたり、不登校経験について考えないようにすることで行動面での適応を保っていると考えられる生徒が半数以上を占めていることが示唆された。本研究では、不登校からの回復について行動面と意識面の両面からとらえたが、行動面では高校での登校状況が良好で回復しているように思われる生徒でも、意識面で「もう不登校時代に戻らないと思う」と安定して感じられる状態にまでは至っていない生徒が少なくないことが明らかになり、やはり不登校からの回復には行動面だけでなく意識面での安定にも目を向けることが必要であると考えられる。本調査で対象となった生徒は不登校経験からまだ日の浅い1年生であることから、意識面での回復までには至っていない生徒が多いとも考えられるが、高校への登校状況が良好であるかという行動面での適応のみにとらわれずに、不登校からの意識面での回復も考慮し、丁寧に支援していく姿勢が必要であるといえる。

また、行動面や意識面での回復と関連する不登

校時の心身状態についても検討を行ったところ、行動面での回復状況と関連が見られたのは「昼夜逆転」のみであり、意識面での回復状況と関連が見られたものはなかった。昼夜逆転があることは、登校という行動につながりにくい要因となり、通信制高校においても行動面における回復を遅らせるのではないかと推測される。本研究では、心身状態について有無のみを尋ねており、その状態の詳細についてはふれていないことから、不登校時のどのような状態が不登校からの回復と関連しているのかについてはさらに検討を重ねていくことが必要である。

次に、不登校からの回復には学校からのどのような支援が関連しており、不登校からの回復は不登校経験への評価にどのように関連するのかを検討した。学校からの支援4因子の平均得点はいずれのタイプにおいても中間点である2.5点を超えており、生徒はA通信制高校において学習・進路面への支援、居心地の良さを感じており、そうした支援が小中学校で不登校経験のある生徒の登校につながっていると考えられる。しかし、行動面では同じように適応しているように見える生徒であっても、意識面において状態の安定を感じている生徒と意識面では不安定さを感じている生徒では、学校からの支援への認知に差が見られていた。「学習・進路への支援」「居心地の良さ」「成長できる環境」といった支援について、登校良好で意識面でも安定している生徒に比べ、登校良好で意識面が不安定な生徒は認知が低かった。意識面で不安定な生徒は学校からの支援が認知されにくいこと、または支援を十分に活用できていないことがうかがえる。また、行動面での適応が良好ではなく不登校経験について考えないようにしている生徒についても、より丁寧な対応が必要であると考えられる。

さらに、多重比較での差までは算出されなかったが、不登校経験への評価についても、不登校からの回復状況のタイプによる有意差が見られていた。不登校経験をプラスの経験であるにとらえること、家族に感謝することにタイプによる差が見られていた。学校からの支援との関連も、不登校経験への評価についても、行動面で登校良好であり、意識面で安定した群の状態が良好であることから、不登校経験からの回復については行動面と

意識面の状態を把握し、両面から支援していくことが重要である。

今後の課題として、本研究は1年生のみを対象としたものであるが、2年生、3年生と通信制高校での高校生活が長くなる中で適応状況（高校での登校状況や不登校への今の気持ち）にも変化が見られると考えられる。高校3年間を通しての適応状況を検討するとともに、その変化と関連する学校からの支援についてもより詳細に検討していくことが必要である。

文献

- 1) 文部科学省. 平成29年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」結果について. 2018
- 2) 片岡栄美. 学校世界とスティグマ—定時制高校における社会的サポートと学校生活への意味付与. 関東学院大学人文科学研究報. 1993, 17, 51—93
- 3) 高田晃治. 高等学校中途退学者のアイデンティティ発達に関する一考察. 心理臨床学研究. 1999, 16, 604—610
- 4) 文部科学省. 定時制・通信制課程について 高等学校教育部会(第19回)配布資料(資料2—1). 2013
- 5) 公益財団法人全国高等学校定時制通信制教育振興会. 平成23年度文部科学省委託事業「高等学校定時制課程・通信制課程の在り方に関する調査研究」. 2012
- 6) 伊藤美奈子・小澤昌之・安田崇子・星野千恵子・福智直美・近兼路子・原聡・鶴岡舞. 不登校経験者の不登校をめぐる意識とその予後との関連—通信制高校に通う生徒を対象とした調査から—. 慶應義塾大学大学院社会学研究紀要. 2013, 75, 15—30